

人は己の能力を2割方高く評価しているため、人事をする者と本人との評価の落差は、ほぼ2割ぐらいあり、このギャップが人事異動のときに不満となって出てくる。

ある方の言葉である。「なるほど」とうなずくしかない。様々な文献にも同様の記述が見られる。また、次の言葉もある。

人事で冷や飯を食わされたとき、どんな面をしているかで、およそ、その人物の器量の程が知れる。冷遇されたと感じたら、今は自分の冬だ、冬の次は春が来る、と思えばよい。

我がことを顧みる。二度目の異動のときはひどかった。どんな面をしていたか、自分でもわかる。いかにもおもしろくない顔をしていたはずである。方言を使えば、ぶすくれるのである。この言葉がぴったりくる。

あの頃の私の器量がわかるというものである。きっと自分のことを過大評価していたのだろう。調子に乗っていた面もあったにちがいない。冷や飯とか冷遇ではないのだが、全く自分の希望は叶わず、過酷なポストが用意されていたことに、ぶすくれたのである。

それでも、新天地に行ってしまうえば仕事はするのだが、しばらくの間は、おもしろくない顔をしていたと思う。まさしく、自分にとっての冬である。だが、不思議なもので人には恵まれた。あまりの過酷さに逃げ出したくなったこともあったかもしれない。それでも、まわりの方々に支えられ、助けられて、何とか仕事を続けた。

あとで気づいたのだが、ぶすくれた顔で行った学校で、実に多くのことを学ぶことができた。自分の力のなさ、無力さも知った。一人では大したことはできないことも知った。いい仕事は、みんなチームでするものだというを経験できた。ぶすくれた異動も、結果的には栄転だったと思える。

さて、今の学校への異動はどうなのか。1年と3か月が経過したが、冷や飯でも冷遇でもなく栄転である。なぜなら、今回も人に恵まれている。生徒、先生方、地域の方々、そして対外的な仕事に関わる皆さんもである。

こう考えると、今までの10回にわたる異動は、すべて栄転のように思えてくる。だが、戻れるものなら、あのぶすくれた顔を何とかしたい。今思い返しても恥ずかしい。情けない。よくも、あんなおもしろくない顔をした人間の相手をしてくれたものだと思う。当時、お世話になった皆さんには改めてお礼を言いたいくらいである。そして、退職するときには、「私の異動は、生涯にわたりすべて栄転でした」と言いたい。